

# ポイント 短歌の文法

第四回

安田

純生すみお

## 「はれぬらし」は「晴れないらしい」か

前回は、現代語の「鳴かなくなる」が文語では「鳴かずなる」と表現されることを述べました。それでは、現代語で「雨は晴れないらしい」という時の「晴れないらしい」は、文語では、どう表現されていたのでしょうか。「ない」「らしい」に、いかにも現代語といった印象がありますので、「ない」を「なき」に、「らしい」を「らし」に置き換えると、「はれなきらし」になります。しかし、この言い方には、聞きなれない感じをもち、違和感を抱く人が、きつと多いことでしょう。もちろん文語では、このような言い方をしませんでした。

では、「はれぬらし」とすれば、どうでしょうか。これで、なんとなく落ち着いた感じがするかもしれませぬ。事実、中世和歌の中には、

降りつづく雨はれぬらし夕ぐれの苔のたもとに風かよふなり

『龜山院御集』

という作が見え、「雨はれぬらし」と詠まれています。「はれぬら

し」は、確かに文語の言い方なのです。この歌の第四句に見える「苔のたもと」は世捨て人や僧侶の衣の袂をいい、第三句以下は「夕ぐれの今、わが苔の袂に風が吹き通うことだ」という意です。しかしながら、降り続く雨が晴れないのであれば、雨風を受けて、袂どころか全身がびっしょり濡れてしまいます。はたして、そういう苦しい状況が詠まれているのか、と疑問もわきます。

実は「雨はれぬらし」は、「雨が晴れないらしい」という意味ではありません。その逆の「雨が晴れたらしい」という意味なのです。今まで長く降り続いていた雨がやんで、「ああ、これで雨も晴れ、もう降らないらしい」という思いが上二句にあらわされています。第三句以下には、風に吹かれている心地よさが歌われているのです。文法的にいえば、「はれぬらし」の「ぬ」は、完了の助動詞「ぬ」の終止形であって、打消の助動詞「ず」の連体形の「ぬ」ではありません。打消の「ぬ」に「らし」が続いた「ぬらし」は、文語の体系に存在しませんでした。

もっとも、打消の「ず」を「らし」が受けることはないのかという点、そうではありません。例えば、同じく中世和歌の中に、

空はなほ雨のころやはれざらしゆきやらぬ雲のなほぞ漂ふ

『伏見院御集』

というのがありますが、この歌の「はれざらし」が「晴れないらしい」の意味をあらわしています。雨を有情の存在と見なした上で、流れ過ぎてゆかない雲が、なお空に漂っているのだから、雨は、「充分に降った」と心はればれに思っていないらしい、と想像しているのです。「ざらし」は「ざるらし」の変化したことでして、打消の助動詞「ず」が「らし」へ続く場合、同じく連体形であって

も「ぬ」ではなく「ざる」が用いられ、「ざるらし」、あるいは「ざらし」となりました。要するに、現代語の「晴れないらしい」は、文語では「はれざるらし」「はれざらし」と表現されていたのです。ですから、「凍らないらしい」「聞こえないらしい」なども、「こほらぬらし」「きこえぬらし」とはならず、

けふ見ればあまの小舟も通ひけり潮満つ浦はこほらざるらし

#### 『源重之集』

宇治川を船わたせよとよばへども聞こえざるらしかぢ音もせず

#### 作者未詳『五代集歌枕』

のように、「こほらざるらし」「きこえざるらし」となりました。そして、「はれざらし」という言い方があったように、「こほらざらし」「きこえざらし」ともいつていたはずです。また、今挙げた「宇治川を」の歌は、もともと『万葉集』巻七所収の作で、原文に「不所聞有之」とある第四句は、現在では、普通「きこえずあるらし」と訓読されています。したがって、「きこえざるらし」「きこえざらし」のほかに、「きこえずあるらし」という言い方もあったことになりましょう。

現代の短歌では、「凍らぬらし」「知らぬらし」など、「……ないらしい」の意で「ぬらし」と表現した例が少なくありません。「見えぬらし」「聞こえぬらし」といった語句が出てくると、「見えたりらしい」「聞こえたりらしい」なのか、「見えならしい」「聞こえならしい」なのか、理解に迷う時もあります。いずれにしても、「……ないらしい」の意の「ぬらし」は、文語の体系になかったのですから、それを文語の表現とはいえないでしょう。また、現代人が、日常的に「はれぬらし」「きこえぬらし」などいつているわ

けでもないのです。現代語とも呼べないでしょう。文語でも現代語でもない言い方なのです。もしも、きつちりとした文語表現を目指すのであれば、こういう言い方は避けなければなりません。

もつとも、「ざるらし」「ざらし」も「ずあるらし」も、古典和歌において、それほど用例が多くありません。なぜ、用例が多くないのかといえますと、一つには、助動詞「らし」が早い時期に日常語から消えてしまったためと考えられます。右に掲げた古歌のうち、宇治川の歌以外の用例は、作者が非日常語を用いて古風に表現したものといえるのです。現代人には、現代語に「らしい」があるので、さほど古風な表現とは思えないのですが、「らしい」は、直接的に「らし」を継承している語ではなく、中世末期に現れた新しい語と見られています。つまり、「らし」が日常語で使われているうちに「らしい」に変化したのではないのです。ですから、「らし」と「らしい」とでは意味や用法の上で相違するところもあって、現代語の「らしい」を単純に「らし」に置き換えられません。しかし、話が長くなりますので、そのことに関しては、今回は触れれないでおきます。

「ざるらし」「ざらし」と類似の表現で、平安時代以後、たくさん用例が見られるのが「ざるらむ」です。ただ、現代の短歌作者は、「らむ」の方に古風な感じを抱くようで、とくに「ざるらむ」などは嫌うようです。